

## 【学位論文審査の要旨】

五輪はスポーツの祭典であると同時に、開催都市・国の文化を世界に発信する貴重な機会でもある。しかし、都市インフラの整備や大会後の施設維持管理などにかかる莫大な費用を理由に、近年多くの都市が招致を断念する傾向が見られる。しかし、テレビ放映権料が高騰していることから分かりますとおり、五輪競技の映像コンテンツとしての価値は依然と高く、国際五輪委員会(IOC)は、映像を意識した五輪を推進するべく、2001年に大会の映像を統括するオリンピック放送機構(OBS)を設立し、オンライン上の独自チャンネル(五輪チャンネル)を開設している。2012年に開催されたロンドン五輪は、このIOCの思惑を巧みに取り込んだ五輪招致計画を立案し、実現させた。それは、市内東部をメインパークとして再開発と共に、市街地の広場や公園を会場とし、そこに仮設競技会場を設置し、競技の背景に都市景観を取り込み、テレビ映像を通じて世界中にロンドンの都市環境や文化を発信するというものであった。本研究ではとくに、選手、競技会場、都市景観の各要素をテレビカメラによって重層的に映し出す映像に着目し、これを「五輪景観」と定義した。

そこで、本研究では、多様なステークホルダーの関与によって、限られた期間に計画から実施までが行われる五輪の特性を踏まえ、ロンドン五輪における大会招致から実施のプロセスのなかで、いかにして「五輪景観」というコンセプトが生み出され、競技会場の計画・設計、そしてテレビ放映のなかで、それが実現していったのかを明らかにする。なお、主な研究方法としては、五輪関係者へのインタビュー調査や計画・設計図書の解読である。

既往の景観研究においては、景観を写真や動画として映像化し、景観認知の把握や景観アセスメントに活用することが試みられてきたが、本研究では、視対象である競技会場を建築的に操作し、それ選手や都市景観とともにテレビ等を通じて映像として発信するための一連のプロセスを研究対象としている点に、学術的新規性を見出すことができる。また、IOCが定める競技会場設計に関する「テクニカルマニュアル」においても上記の視点は欠落しており、実務的にも本研究の有用性は示唆される。

第2章では、既往の景観研究等の蓄積と照らし合わせて、「五輪景観」の概念や空間構造を明確化し、実際にロンドン五輪における「五輪景観」を有する7競技会場(8競技)を抽出した。

第3章では、ロンドン五輪の大会招致から実施計画立案の段階において、過去のバルセロナ五輪やシドニー五輪の参照や、観光政策を推進する政府の支援取り付けが背景となり、「都市を見せる五輪」というコンセプトが立案され、定着してゆくプロセスを明らかにした。

第4章では、「五輪景観」を創出する五輪競技会場の計画・設計内容について、開催都市ロンドンや競技団体、そして建築設計関係者の多様なステークホルダーの関与の変遷に着目して明らかにした。ロンドンでは、観客に見せるべき、あるいは世界に発信すべき、開催都市の歴史や文化を象徴する都市景観の価値が共有され、保全されていた。また、このような景観を望む視点場が、競技場の面積要件を満たす程度の敷地規模を持つ公園や広場であった。これは、まさに中心部に大規模な公園・緑地を有し、都市保全に取り組んできたロンド

ンの強みであったと言える。その上で、招致委員会や建築事務所によって競技会場の周辺都市景観のランドマークへの指向性を持った観客席の形状や配置といった建築計画・設計レベルでの工夫が行われた。

第5章では、競技する選手と競技会場の背景に映し出された都市景観について、カメラがどこから、どのようにして映し出したのか、公式記録動画におけるカメラポジションとカメラワークの調査・分析を行い、シーン型とシーケンス型との差異や、映像として効果的に映し出す工夫点を整理した。

第6章では、前章までの知見を踏まえて、五輪の招致から開催、そして競技実施のプロセスにおいて、「都市を見せる五輪」というコンセプトが、いかに競技会場の計画・設計やカメラポジション・カメラワークに落とし込まれていったのか、段階や主体に着目し、全体の経緯を整理した。

以上の内容から、第7章では、「五輪景観」創出に向けて、計画・設計の際の拠り所として「都市を見せる五輪」というコンセプトが関係者間で早い段階から共有され、広場や公園、そして眺望景観などロンドンの都市空間の構造の特徴が積極的に各競技会場の計画・設計に反映されてきたことを指摘した。また、このような建築を含む注目度の高い映像は、近年のメディアのニーズに応えたものであると同時に、とくにマイナー競技や、都市文化のなかで育まれてきたアーバンスポーツ等の新競技の普及促進という点において、今後有用性が増してくることを展望した。